

【資料紹介】

大磯町寺坂の鈴木房五郎墓碑（碑文）——碑文にみる生涯とその思想の特質

岩崎 稔

はじめに

鈴木房五郎の生涯とその思想の特質がうかがえる墓碑が発見された。鈴木房五郎とは、文久元年（一八六一）九月三日、大磯町寺坂に生まれ、明治十四年（一八八一）湘南講学会に加わり、同年、師範科を卒業後、思文館支校万田学校で教師となり、明治十八年六月、渡米を果したが、病気に罹り明治廿年六月やむなく帰国し、病床のかたわらに「東西文明比較論」を著し、明治二十六年四月二十二日三十三歳の若さで亡くなった人物である。

今回、鈴木房五郎の墓碑発見のきっかけをつくったのは、民権結社「湘南社」の会員探索のための追跡調査であった。湘南社および講学会の名簿には鈴木房五郎の名前は載っているが、湘南社で何をしたのかは解明されていない。そこで本稿では、大磯町寺坂の鈴木房五郎の墓碑（碑文）の紹介を目的としつつも、あわせてこれを手掛かりに彼の生涯と思想の特質を後藤瀧²などの交友関係のなから考察したい。

一 鈴木房五郎墓碑（碑文）

鈴木房五郎墓碑碑文【表面】

鈴木房五郎墓 法名 爾陽庵大湖房還居士

鈴木房五郎墓碑碑文【裏面】

君姓名曰鈴木房五郎甚右衛門第二子也以文久元年九月三日生明治十四年本縣師範科卒業教授郷校十八年六月慨然航于米國勞役之餘修學不倦人稱其堅忍爾

来追君之跡者頻々相踵廿年六月罹疾帰国廿六年四月廿二日没享年三十有三君為人寡言沈毅敬事上帝常優學生之薄志綿行欲以身矯正之雖志業不終其興起人心警鐘後生者固非鮮少也所著有東東西文明比較論兄増之助欲建碑慰魂余深惜君之玉碎者叙其慨

明治二十七年四月
辱文 近藤市太郎



鈴木房五郎墓碑

高さ：110 cm
幅：74 cm～34 cm
所在地：迎接院（大磯町寺坂）
鈴木家墓地

【読み下し文】

君、姓名ヲ鈴木房五郎ト曰フ。甚右衛門ノ第二子也。以テ文久元年九月三日ニ生ル。明治十四年、本懸ノ師範科ヲ卒業シ郷校ニ教授ス。十八年六月、慨然トシテ米國ニ航ル。勞役之餘、修學ニ倦マズ。人其ノ堅忍ヲ稱フ。爾来、君之跡ノ者頻々相踵グ。廿年六月、疾ニ罹リ帰国ス。廿六年四月廿二日没ス。享年三十有三。君、為人寡言・沈毅。上帝ニ敬事シ常ニ優ル。學生之薄志・綿行、身ヲ以テ之ヲ矯正セント欲ス。志業終ラズト雖モ、其レ人心ヲ興起シ、後生ヲ警鐘スル者、固ヨリ鮮少

二非ザル也。著ス所、『東西文明比較論』ヲ束ム。兄増之助、建碑・慰魂ヲ欲ス。余、君之玉碎ヲ惜ム者。因テ其ノ概ヲ叙ス。

明治二十七年四月

辱文 近藤市太郎

【記者註記】

『伊達時日記』明治三十八年（一九〇五）八月二十六日（土曜・丁酉）条³「陰、午前秦野村上氏、埴町途次（路）来る。午後、寺坂の鈴木（房五郎）の碑字を渡邊氏（渡辺慶次郎）の囑にて揮毫す。」

二 鈴木房五郎の生涯

発見された大磯町寺坂の墓碑（碑文）の碑文の前半部分について解説を試みたい。「君、姓名ハ鈴木房五郎ト曰フ」から始まり「二十六年四月廿二日没ス。享年三十有三」で終わる碑文の前半部分は、彼の短い生涯と略歴が記されている部分である。

碑文によると鈴木房五郎は、文久元年（一八六一）九月三日、父甚右衛門の第二子として洵綾郡寺坂村（現大磯町寺坂）に生まれ、「明治十四年、本縣ノ師範科ヲ卒業シ郷校ニ教授ス」とある思文館教師時代を迎える。房五郎は明治十年（一八七七）四月、教員不足を補うために補助教員（師範生）として思文館支校の万田学校で働き始めた⁴。当時の同僚には民権家の出縄善太郎がいた。また、すでに本格的な教師の道に進むべく師範学校師範科へ進んでいた。墓碑碑文にある「師範科ヲ卒業シ、郷校ニテ教授」とある教師時代である。なお、房五郎が思文館に在職する以前、思文館には、近藤市太郎（明治六年〜二十五年）、水島保太郎（明治六年〜十二年）、伊達時（明治七年〜十年）、一宮良太郎、近藤儀三郎、山口兵太郎ら、のち湘南社・講学会⁵で活躍する錚々たる顔ぶれの民権家たちが教員として在職していた（括弧内在職期間）。房五郎もまた明治十四年の「湘南講学会規約」（追加附条）に「寺坂村鈴木房五郎」と名前が記されており、湘南講学会の参加者の一人であった⁶。房五郎にとって思文館時代は一方で湘南社との出会いと修学の時代でもあった。房五郎は、彼ら同僚との接触によって初めて「欧米の近代思想」を

知り、やがて、明治十四年に開講したばかりの湘南講学会に入り、欧米の原書⁷に接しながら受講と論議を重ねていったのであろう。

明治十八年六月、房五郎は、明治十年から七年間、思文館支校で働いていた教員生活と決別し、ついに心を奮い起こし、アメリカへと出発する。碑文にある「十八年六月、慨然トシテ米國ニ航ル。労役之餘、修学ニ倦マズ」とある房五郎の渡米時代である。彼の渡航目的は、湘南社講学会で知り得た欧米の近代思想を実際の渡米によって、その何たるかを掴むためであったようだ。房五郎の渡米の翌年、明治十九年には、渡米直後で不慣れな石坂公歴⁸のアメリカ生活を近藤賤男（洵綾郡山下村）らとともに世話している。その間、近藤賤男や鈴木房五郎のアメリカでの生活ぶりに触れて、彼らの実際の様子⁹が公歴の手紙「アメリカ便り」に記されている¹⁰。それによれば房五郎も近藤も小学校に通いながらスクールボーイの生活をしてきた。その生活は「毎日皿ヲ洗ヒ毎夜皿ヲ洗ヒ某家ノ一室ヲ借り受ケ居リテ家ヲ掃除シテ学校ヘ行キ得ルモノ給金ハ一週間尅弗ヨリ四弗迄」というものであった。「近藤鈴木ハクックトスクールボーイヲ兼ねテイル」と公歴は言い、公歴自身も「スクールボーイニテ無給ニテ働き食事ハ主家ニテ致シ宿泊ハ福音会ナリ」と記している。福音会とはオー克蘭ド福音会とみられる。次に碑文の「人其ノ堅忍ヲ称フ」との言葉からは、渡米での房五郎の生活の様子が、つねに手紙で故郷の寺坂村の両親や兄増之助、友たちへ伝えられていたことがうかがえる。さらに「爾来、君之跡ノ者頻々相踵グ」という言葉が続くが、これは辛苦（労苦）に堪えながら学問を継続した鈴木¹¹の姿勢にならう者が相次いだという意味である。実際の聞き取り調査で「私の祖母はアメリカで生まれた」（寺坂）とか、「アメリカの家をみて素敵だと思ひ洋館にした」（生沢）など、渡米者の声を多く聞いたが、明治期の大磯に渡航者が多いのは鈴木房五郎の跡を追ったゆえではないかとも思われる。次の「廿年六月、疾ニ罹リ帰国ス。廿六年四月廿二日没ス」については、石坂公歴の「アメリカ便り」に詳しく触れられている。少々長くなるが重要な点と思われるので引用してみる。姉美那宛ての手紙¹²には「当地ニ居ルモノハ皆人品宜シト云フハ常ニ肉食スレバナリト云フ、近藤鈴木等モ顔色ニ艶アリテ身体ハ美ニ壯康ナリト云フ」と言っていたが、石坂昌孝宛の明治二十年四月一日の夜の手紙では、鈴木房五

郎の風邪の記事に変わる。その手紙は次のように綴られている¹²⁾。

鈴木房五郎二月ノ中旬ヨリ風邪ノ為メ会ニ来リテ療養致居候所三月ノ中ニ至リ桑港ニ竹山トカ云フ北越人ニテ医者ヲ業トスルモノ今ハ日桑商會ト云フ少些ナル店ヲ出シ居ルモノニ診察セシメントシテ桑港ニ至リシニ全人ハ商用繁務ノ為メ其暇ナシトテ謝絶セリ依テミッシヨシ町ナル日本人青年基督信者会ニ新ニ日本ヨリ来リシ海軍医某ニ診察ヲ求メシニ其者ハ肺病(ラング)ノ始メナリト診察セリ依テハ空氣ノ清爽ナル処ニ療養スベク国ニ歸リテ晃山ニ一月モ居レバ直ニ全快スベシト云ヘリ○目下鈴木ハ一週間尙弗半ノ給料ニテ無一物ノ為メ無余義ハリス牧師ヨリ添書ヲ得テ郡ノ病院(当地ノ郡ハ我国ノ三四郡ヲ并セタル如キ広サナルベシ)ニ入院ヲ請ヘリ此病院ハ公費ナリ誠ニ不得止ノ下計ナリ昨日之レヲ見舞ヘリ地ハ桑港灣ニ望ミ四望頗ル快活ナリ院ハ山麓ニアリ当欧苦乱土ヲ去ル英十一里汽車通行セリコントラコスタカウチーナルサンレアドルト云フ、鈴木云フ此院ハ下等社会ノ来ル所故取扱ハ粗末ナレドモ万事行届キ居ル様ニ思ハル病室ハ八人ヲ入ル重キ者ト軽キ者ヲ入レ軽者ハ重者ヲ助ケ朝夕互ニ重キ者ヲ世話スルナリト云フ百姓ハ時々馬ヲ引イテ畑ニ出テ植木屋ハ植木ヲ世話セリ固ヨリ病人ノ事故仕事ニ極リナシト云フ全人ハ此院ニテ一週間ヲ経シノミ病状マエニ全ジト云フ兄ノ見タル所ニテモ重キニハ非ズ毎週一度位遊ビニ行クニ善キ所ナリ

さらに「森久保氏渡航」の件での問い合わせのことに触れたあとに「公立学校の月謝無料」のことを伝え、学校での教員と生徒の関係が親密であることとを、鈴木房五郎を引き合いに出し「現ニ鈴木房五郎病氣ニテ臥床ニ某校ノ教員(教員ハ小学校ハ女ノミ)見舞ニ二三度来リシ也」と述べている。

鈴木房五郎はその二か月後、帰国することになる。公歴の手紙における房五郎の病氣と碑文にある「明治廿年六月、疾ニ罹リ帰国」という文脈がつながって理解できる。「一か月も帰国して養生すれば全快する」との海軍医の言葉を信じたのだろうか。再び渡米することを望んだが、それは叶うことはな

かった。

房五郎の帰国後、石坂公歴は、従来抱いていた渡米の目的であった「生活再興」の考えを転換し、オー克蘭ドで邦字新聞「新日本」を発行し、海外から日本政府批判の政治活動を展開する。他方、帰国した房五郎は、病床にある傍ら、渡米の経験を「東西文明比較論」の著書に纏めるべく著作活動に専念していた。房五郎がアメリカから帰国した二年後、明治二十二年十月二十八日、同郷の友で同年生まれの後藤潤¹³⁾が移民先のハワイで白人らによって虐殺された事件の報を受け取る。明治二十四年十一月、後藤の墓碑建碑の際には友人として伊達時の名が刻まれ、追悼の撰文を房五郎が記している。後藤潤の享年は二十八歳であった。明治二十六年四月二十二日、後藤を追うように房五郎も病没した。三十三歳という若さであった。房五郎の墓碑は翌年四月に兄増之助によって建碑され、近藤市太郎が撰文した。

鈴木房五郎の生涯は、三十三歳という若さでの不運の生涯であったが、その生涯を振り返ると、大きく三つの時期に区分される。第一期は、文久元年に生まれてから、明治十八年の渡米前の幼少期から青年期までの時期である。同郷の後藤潤や湘南社、また思文館での教員同士の交流と学習、論議の時代で、師範学校時代もこれにあたる。次の第二期は、明治十八年六月から明治二十年六月までの丸二年間の渡米時代である。この時代は、山下村の近藤賤男や石坂公歴らと在米邦人との交流と「堅忍」の時代といえそうである。次の第三期は、明治二十年六月から明治二十六年四月の病没までの時代である。帰国後の病氣療養の六年間であり、病床にありながら「東西文明比較論」の著作活動を続けた晩年の時期にあたる。すなわち、房五郎の生涯は、湘南社による「欧米思想」との接触、渡米によるアメリカの異文化との接触、帰国後の最晩年にあたる病床での「東西文明比較論」をめぐる思索と著作活動の、三つの時期に区分される。

三 鈴木房五郎の人物像とその思想的特質

鈴木房五郎の人柄は、墓碑によると、寡黙で沈毅な人物と記されている。「君、為人寡言・沈毅。上帝ニ敬事シ常ニ優ル」という一文がそれである。「寡

言」とは、口数の少ない無口なことをいう。さらに「沈毅」とは、落ち着いて物事に動じないことをさし、普段は寡黙で無口だが、実行力のある人物のようにみえる（「上帝ニ敬事シ常ニ優ル」については後述）。碑文以外に房五郎の人物を探る手立てとして、石阪公歴のアメリカからの手紙を見てみたい。石阪公歴が渡米した直後のサンフランシスコで「ケーブルカーの仕掛け」を房五郎に尋ねる場面（誰に尋ねても教えてくれなかったことを房五郎が的確に説明してくれた）や、房五郎が病氣となって「郡ノ病院」に入院してからの病室の様子についての説明、また発病から帰国にいたる期間がきわめて短い等、公歴の手紙にみられる房五郎の言葉に耳を傾けると、その思慮深さと「沈毅」な態度の裏側にある行動力のある人物像が浮かびあがる。また、石阪公歴の鈴木房五郎と近藤賤男の人物評が、彼らの人物像を探るうえで、特に興味深い。公歴は両親宛ての手紙¹⁴のなかで、「近藤ハ才子ナリ周旋ハ至極上手ナリ」と述べ、他方「鈴木ハ一等上ノ人物ナリ」と注目すべき二人の人物評を載せている。

次に「学生之薄志・綿行、身ヲ以テ之ヲ矯正セント欲ス」という文面が出て来るが、「身ヲ以テ之ヲ矯正セント欲ス」というのは、何を意味するのであるか。房五郎の教師時代の一面を彷彿とさせる記述である。「人間は強い志をもつことによって物事を成し遂げていく」その核になっているのが、忍耐の力だが、いまの学生たちは「薄志弱行」で強い意志に欠ける。だから、それを「矯正」するのだという思想は、まさに『西国立志編』の思想だ¹⁵。房五郎の渡米時の「堅忍」の底にあったものも、この忍耐の力ではなかったろうか。房五郎の不屈な精神と実行力を思う。

次に来る文面がこの墓碑（碑文）の眼目となる部分のように思う。「志業終ワラズト雖モ、其レ人心ヲ興起シ、後生ヲ警醒スル者固ヨリ鮮少ニ非ザル也」という一文にある「覚醒」の部分は何を意味するものであろうか。碑文はそれを具体的に語ってはいない。しかし明治のこの時期、人心を興起するとは「封建思想の打破」以外には考えられない。おそらく、房五郎の胸にあったのは、夢がない、夢を持たない、また社会を変えようともしない旧習に囚われている者の、消極的で受け身の体制順応型の生き方に対して、まさに「警醒」を鳴らしたいとの思いであったのだろう。いまだ残る封建的な因習や様

式などを脱して、西欧の近代的な、自由と独立の気風を身につけようとした民権結社湘南社の精神がここに生きて、房五郎に受け継がれている。湘南講学会で学んだことが、そこに、生かされているとみていいだろう。それがまた、房五郎に渡米を決意させた要因の一つであったように思う。いかにして旧態依然とした旧習を改め欧米並の近代社会にしていくか、そのための方策を考えていたのではないか、と思いたくなるような文面である。その観点から碑文の語句を吟味していくと「上帝」という言葉に注意が向く。それがなぜ、注視しなければならぬ言葉かというところ、「主、キリスト教の神」を意味する言葉で、これも極めて倫理性の高い言葉と理解される。碑文を書いた近藤市太郎はメソジスト国府教会の設立者の一人でありキリスト者であるが、房五郎が「受洗」した記録はない。だが、その可能性も否定できない。

房五郎が「渡米」で得たものは何であったのか。また「渡米目的」はどこにあったのか。病に罹り日本に帰国してからの「東西文明比較論」をめぐる思索は、どこに狙いがあったのか、そのようなことを考えると、渡米して「堅忍」のなかで、懸命に苦学を続けようとした意志の強固さの裏にあったものは、アメリカ文明の衝撃とアメリカでの体験のなかで得た、日本の近代化とは何か、「東西文明論の本質」を掴みたいという強烈な房五郎の思いを、先ず以て痛感せざるを得ない。そして、そこから得たものが「主体的に生きよ」という後生への強烈なメッセージではなかったのか、と思う。

まとめ

墓碑の紹介を通して鈴木房五郎の生涯とその思想に迫ってみたが、どの程度解明されえたであろうか。残された問題として、第一に房五郎の生涯を墓碑から探るといふ手法では、大雑把にしかわかり得ないということがあげられる。墓碑碑文には細部にわたって記載されていないからである。その幼少時代から師範科時代を経て教員時代、そこから渡米時代、その後の帰国後の病床にあった晩年期、それらのどの部分も渡米期の一部分を除いて明確ではない。史料となるものが殆どないなかで、その生涯をたどるのは依然として困難がともなうが、生涯の各部分でかわりをもった周辺の人物から再度探

りを入れていくことは必要であると痛感している。今後の史料の発見が待たれる。

第二の問題は、鈴木房五郎の思想の展開過程を理論的に整理することである。つまり彼の教員時代の「学生の薄志」に対する実践的な行動を起点として、湘南社が目指したものととの結節点が、どこにあるのかを探ることである。そして、それが、どのように房五郎のいう「東西文明比較論」に収斂されていくかということである。湘南社はその第一条で「本社ハ諸般学術ノ研究ト智識ノ交換ヲ図リ、漸次社会革進ノ気脈ヲ貫通セシメン為メ、各自同一ナル主義ヲ以テ成立スルモノトス」と第一条で、その目的を掲げている。また、湘南社講学会規則第一節では「本会ノ目的ハ自由ノ真理ヲ闡キ、人權ノ通義ヲ暢フルニ在リ」としている。この「社会革進ノ気脈」と「自由ノ真理」を開き「人權ノ通義」を述べるのが、房五郎が「警醒」して止まなかったものの本体であり、それが欧米思想にいう「近代化」という括りで呼ばれているものと考えられるが、今後より考察を深めていかなければならない。

【謝辞】

鈴木房五郎墓碑（碑文）をはじめとして、鈴木甚右衛門・増之助・小早川勝蔵の各墓碑の翻刻と読み下しは、川島敏郎氏によった（後掲註（1）・（2））。記して謝意を表したい。

註

¹ 鈴木房五郎家は『新編相模国風土記稿』によれば、「○迎接院（こうじょういん）自來山と号す、浄土宗、京都知恩院末、開基、鈴木甚左衛門、卒年を傳えず、村民清左衛門の祖なりと云、中興開山慶応、元和九年（一六二二）七月十二日寂、本尊阿弥陀、又恵心作の観音を置、長八寸五分、【寺寶】△阿弥陀書像一、幅恵心の筆と傳ふ、△当麻中将姫蓮絲名号一幅」とあるように、代々甚左衛門を名乗る旧家の家柄である（大日本地誌大系『新編相模風土稿』第二卷村里部淘綾部「寺坂村」の項。三〇四〜三〇五頁。雄山閣、一九九八年）。

鈴木教夫さんによれば「鈴木家はもともと寺坂に居たのではなく、伊豆あつた家で、北条早雲に連れられて、ここに来た」と言い、「家の代は十五から続いている」という。この鈴木家は、伊豆衆二十一家のうちの一つで、延徳三年（一四九一）以降に後北条の

家臣団に加わった家であったが、後北条家滅亡後、天正十八年（一五九〇）に、足柄上郡金子の地に移転し、その後寺坂に移ってきた家であるという。この鈴木（房五郎）家には大八車で浅草から引いてきたという阿弥陀如来があり、同族の鈴木（与志郎）家には、明応四年（一四九五）二月ののぼり旗（旗指し）、北条氏政の位牌、北条早雲の木造、弓術の指南書などが現存するという（鈴木昇著『大磯の今昔』（三）六一〜六二頁。鈴木昇、一九八三年）。これらによって鈴木（房五郎）家が磯崎寺坂でどのような地位を占めていた旧家であるかがうかがい知れる。迎接院の裏手の高台にある鈴木家の墓地には房五郎の墓碑、父甚右衛門の墓碑、兄増之助の墓碑が並んで建てられている。



迎接院裏手にある鈴木家墓地



自來山迎接院

鈴木甚右衛門（房五郎の父）墓碑

【墓碑表面】

鈴木甚左衛門
安興院政庵吉翁居士

【墓碑表面碑文読み下し】

故鈴木甚右衛門ハ清衛門ノ長子也。幼名ハ政吉。天保五年五月五日ニ生マル。安政元年家督ヲ襲ギ、夙ニ家産哀微ヲ患ヒ、忍耐精勵シ再興ニ務ム。明治七年、本郡北部ニ到リ、量地製図ニ従事ス。十一年郷村十二帰ル。十三年四月、家ヲ譲ル、子増之助、後ニ尚ホ、家事ヲ興シ、家屋敷ヲ建設ス。四十四年一月二十五日ヲ以テ病没ス。七十有八。

明治四十五年一月 嗣子増之助之ヲ建ツ。

大正八年十二月六日病ム。

年八十有一 鈴木ヤエ子

鈴木増之助（房五郎の兄）墓碑

【墓碑表面】

鈴木増之助
静契院純明智貞大姉



兄増之助墓碑



父甚右衛門墓碑

【墓碑裏面現代語訳】

亡き父増之助は甚右衛門の長子として、安政五年十一月廿四日に寺坂に生まれ、幼くして家事を助け、刻苦しながら成人した。明治十三年二十三歳にして寺坂村村会議員に当選した。同十七年再選され、同二十八年国府村村会議員に当選。同二十九年には国府村収入役になり、同三十三年には助役に推任され、各一期を勤めた。その間、明治四十四年より大正八年まで郡会議員を二期勤めた。大正十四年から引続き学務委員となった。亡き父は性格が温厚実直で、正義感が特に強く、いざ事に臨む際は思慮深く策を練り、不撓不屈の精神で初志を貫徹しなければ納得しないという意思を堅持していた。その生涯は公私にわたり波瀾曲折が多かったが、よくこの難局を克服し、家をよくまとめて家運の隆盛を図り、外では公事を忠実に実行して職務を全うした。亡き母サダは万延元年四月二十日、足柄下郡羽根尾村峯尾太郎兵衛の四女として生まれ、明治十三年五月六日に入籍して、七男四女をもうけ、生まれつき相手の心情を慮る気持ち強く、勤勉でかつ剛毅不屈事で何事にも動ぜず、苦楽を共にし、寝食を忘れて家事に励み、厳しい勤めにも慈愛をこめて子女の教養怠らないなど、婦人として努めに尽力した。子女は現在成人となり、父母の余生を慰めて労わるようになったが、親に何も報いることができないままに、急に病に罹り、父は昭和九年十二月二十九日、享年七十有七、母は同年二月一日、享年七十有五をもってたちまち逝去した。誠に痛根の極みである。

昭和十二年二月

兄増之助は、明治二十七年（一八九四）四月、三十三歳の若さで亡くなった弟房五郎の慰魂のための無念の建碑を行っているが、兄増之助が、どれほど、房五郎の将来に期待を寄せていたのかを、うかがい知ることが出来る。それが近藤市太郎の房五郎への「余、君之玉碎ヲ惜ム者」との言葉に言い表されている。その死が深い衝撃であったことが伝わる碑文である。

2

後藤潤・文久元年（一八六一）九月十四日、明治二十二年（一八八九）十月二十八日。享年二十七。明治二十四年に墓碑が建碑される。潤は旧姓を小早川勝蔵といたったが移民には嫡子では困難とのことで生沢村後藤家の養子となる。父は小早川伊右衛門、母はサヨ。文久元年九月十四日、七人兄弟の長男として生まれる。幼い頃から鋭敏で頭がよく、書をよくした。明治十二年、山口左七郎郡長時代に大住海綾郡役所の雇員となったが、後に神奈川県庁の雇員に転じた。明治十八年、第一回官約移民として渡航、ハワイ島ホノカアのさとうきび農園で三年間働いた後、自らの店を開業した。英語に堪能であった潤は、奴隷同様の厳しい労働条件のために、移民労働者と農場主との争議交渉に奔走した。労働者のために最善を尽し、一步も譲らなかつたために白人の反感を買ひ、農園火災の事件に巻き込まれて虐殺された。その殺され方は電柱に吊るされた残酷なものであった。明治二十二年十月二十八日のことであった。明治二十四年十一月、実父によって建てられた墓碑からは「夢を抱いて渡航した潤への慈しみ、志半ばで潰えた悼み、そして何よりも移民労働者たちの声を訴え続けた勇気を称える思いがひしひしと伝わってくる」ものである（佐川和裕「明治の記憶」知られざる英雄・後藤潤）『Report 大磯町郷土資料館だより』No.三六、二〇一六年）。鈴木房五郎は後藤潤の死に際し、「開拓者（開拓者）に悼惜せざるものはなし」と述べ、彼の死を「仁に斃れ義に死す」と称え、碑文の最後で「彼の身体は滅しても、その名は残るであろう」という一節をもって結んでいる。後藤潤は房五郎にとつて、同郷（寺坂村）の、幼い頃からの友で、しかも文久元年の同じ年の生まれでもあった。後藤潤の大磯墓碑が訴えるものは、後藤潤のハワイでの行動の根底にあるものは「湘南社から発した西洋自由民権思想が後藤潤に反射してハワイ移民労働者を照らした」また「後藤潤のハワイでの行動は、湘南社の自由民権思想が何であったか、の示唆を与える」と後藤潤研究者の加藤喜規さんは指摘しているが（加藤喜規「神奈川県に残された後藤潤の足跡」（日本移民学会第二十六回年次大会報告）二〇一六年）、この意見に、共感と共鳴を覚える。房五郎が潤のことを「開拓者」と呼んで潤の死を悼みハワイでの活躍を評価し称えているのは頷けるものである。これも湘南社の精神が後藤潤や鈴木房五郎に受け継がれている左証であろう（嘉屋文子『後藤潤のこと』溪水社、一九八六年・「知られざる英雄」嘉屋日米交流基金、二〇〇八年・堀江里香「後藤潤リン手事件と記念碑、ハワイ日系社会黎明期の記憶の表象」『アメリカ研究』第



房五郎の兄増之助
（鈴木教夫氏所蔵）



増之助の妻サダ
（鈴木教夫氏所蔵）

四十七号、二〇一三年。

小早川勝蔵(潤) 墓碑(大磯町上寺坂) 普門寺跡

【正面】 小早川潤墓

【右側面】 明治二十四年十一月十五日

建父 小早川伊左衛門

友人 伊達時書

【裏面】 碑文 一七六文字

友人 鈴木房五郎 謬弁書

【碑文読み下し】

君、諱ハ潤、舊稱ハ勝蔵、本姓ハ小早川。故有リテ後藤氏ヲ昌^{とよ}。父ハ伊右衛門、母ハ府川氏。父次元年九月十四日ヲ以テ生マル。兄弟ハ六人。君、即チ其ノ伯(長男)也、幼キ自切英敏、尤モ書ヲ善クス。明治十二年大住・淘綾郡署ノ雇員、後ニ轉シテ神奈川縣廳ノ雇員トル。(明治)十八年ノ本邦労働人監督之命ヲ承リ、布哇ニ航ル。翌年、序ニ感ズルコト有リテ辭職シ、商業ニ専従ス。而シテ我労働人ノ為ニ力ヲ竭シテ豪モ讓ラズ、却テ其ノ國ノ兇徒ノ為ニ財産ヲ奪ハレ没ス。實ニ(明治)廿二年十月廿八日也。開者ハ悼惜セ弗ルモノハ莫シ。況ンヤ其ノ父昆弟(父母兄弟)ニオイテ乎。碑ヲ建テ以テ焉ニ情ヲ表スハ当然也。銘ニ曰ク、仁ニ斃レ義ニ死ス、古ヘ自リ厥ノ身ヲ貯尊シ、厥ノ名ヲ滅スト雖モ即チ存スト。

友人 鈴木房五郎 謬弁書ス。

【鈴木房五郎の交友関係・渡航者一覧表】

渡航者名	鈴木房五郎	石阪公歴
出身村	淘綾郡寺坂村	多摩郡野津田村
渡航先	アメリカ	アメリカ
渡航期間	一八八五〜一八八七	一八八五〜一八八九

3 伊達正男家文書整理番号六四号(『三宮町史資料所在目録 二宮・山西地区』二宮町、一九九一年)。なお、伊達時日記は(一〇一九年に二宮町から刊行される予定)である。

4 現在の国府小学校の前身であった思文館は、明治六年(一八七三)六月、生沢村東昌寺に開校した。同月二十四日には二宮支校が知足寺に、さらに七月二十二日には山西支校が法蔵寺に開校した。また、思文館の学区は十六カ村の広い地域であるため、本校を生沢村東昌寺に(学区は旧国府村)、一宮支校(五カ村)、万田学校(四カ村)の二つの支校をおいた(『三宮町史 通史編』(二宮町、一九九四年)第五編第一章第五節)。鈴木房五郎は、明治十年四月に、第二十八番万田学校の補助教員(師範生)であった。当時の同僚には、出縄善太郎がいる。房五郎はこれら同僚との議論のなかから新しい時代の到来にともなう近代思想を学び取っていったと思われる(『大磯町史3 資料編 近現代(1)』(大磯町、一九九八年)No.四九)。

5 湘南社とは、明治十四年八月設立された民権結社で、山口左七郎を社長として大住・淘綾両郡を地域母体として、大磯、伊勢原、秦野、金目(平塚)などに支社をもつ相州で最初の最大の啓蒙学習結社である。会員はおよそ百五十名、事務局を大磯に置いた。湘南社の同系組織であった湘南講学会規則には、八十二名の会員の名簿が残されている。

そのなかの一人が鈴木房五郎であった。湘南講学会で盛んに論議されたものの中に「湘南社の憲法論議」と称される論議があった。この湘南社の憲法論議では、多くの私擬憲法草案が「君民共治」の二元論を主張するなかで、それらの意見には同調せず、「主権在民論」が堂々と主張された(大塚憲二編『相州自由民権百二十五周年記念碑建立記念誌』(公益財団法人雨岳文庫、二〇一六年、十二〜十五頁)。ここで、鈴木房五郎と後藤潤(小早川勝蔵、後掲註(7))のそれぞれの墓碑に刻まれた湘南社の人びとの略記しておきたい。その最初の人物は、山口左七郎(一八四九〜一九二二)享年六十四。大住・淘綾の両郡長、のち「湘南社」社長。足柄上郡金子村(現大井町)に生まれる。二十二歳の時、山口作助(現伊勢原市上粕谷)の養子となる。第一回衆議院議員。政界ののち、実業界や地域社会、農村近代化へ尽力。伊達時(一八四九〜一九一六)享年六十七。山口左七郎の朋友。二宮村に生まれ、思文館の教員。湘南社結成に参加。医師、県会副議長。衆議院議員。二宮駅設置、県医師会長などを歴任。近藤市太郎(一八五六〜一九三六)享年八〇。淘綾郡国府本郷の名主、戸長。思文館教員、湘南社主催演説会の弁士、キリスト教の受洗を受け、日本メソジスト教会(国府教会)設立。国府村村長、県会議員、県会議長を歴任。のち各種産業団体を設置。中郡盲人学校(県立平塚盲学校の前身)の設立に尽力。鈴木房五郎墓碑に撰文を寄せている。

6 『大磯町史3 資料編 近現代(1)』No.四六。思文館教員での湘南講学会の名簿にある人物を列記すると、二之宮村伊達時・中里村水島保太郎・国府本郷村近藤市太郎・同村近藤儀三郎・生沢村二宮良太郎・寺坂村鈴木房五郎・万田村出縄善太郎・国府本郷村山口兵太郎ら八名がいる。

7 湘南講学会の基本テキストは、ベンサム『立法論稿』J・Sミル『自由之理』フォーセント『宝氏経済学』F・リバー『自治論』などであったが、それらの訳書及び原書講読がおこなわれていた(大畑哲・佐々木徹・石倉光男・山口匡一著『雨岳文庫第一集 山口左七郎と湘南社』まほろば書房、一九九八年)。

8 石阪公歴(慶応四年(一八六八)一月十六日〜昭和十九年(一九四四)享年七十六。慶応四年一月、三多摩の豪農で自由党指導者の一人、石坂昌孝の長男として生まれる。神奈川県の青年民権家。明治十六年(一八八三)十月十八日、東京小梅村の若林美之助宅で「読書会」を発会するが、中途挫折。九月二十七日、渡米の決意について堀川監獄に拘留中の村野常右衛門に書き送る(家計の改復、商業実地研究、郷家の存亡)等)十一月、新橋の美以美(福音会)英語学校(サンフランシスコ福音会)の美川貫一が前年設立)へ入学。明治十九年、サンフランシスコに向けて横浜を出港。十二月十九日、十八日間の船旅を終えサンフランシスコ到着。渡米直後に近藤賤男、鈴木房五郎らに世話を受けながら邦人発展の揺籃地といわれたサンフランシスコ対岸のオークランドでの生活を開始。英会話の習得と学校入学への意欲を示していた。明治二十年六月、鈴木房

五郎が病気のため日本に帰国。房五郎帰国の後、「学術」と「実業」という「前途ノ計画」から「愛国ノ衷情」によって突き動かされた政治運動（政社の結成）への転換が始まる。その転換へのきっかけをつくったのは、明治二十年七月八日に表面化した条約改正交渉問題であったといわれている。同年十二月中旬、北村透谷は、アメリカで発行された邦字新聞『新日本』を受け取る。これが「亜米利加に寄留する男児之友」石坂公歴からと直感して、公歴に宛てた返信を書き始めるが、書くことを途中で断念している。その理由は海外にて活動を展開する公歴に「亡命民権家」と称される人々へのとまどいがあったようだ。明治二十一年一月、愛国有志同盟会（のち愛国者同盟）が設立され、「新日本」のメンバーと合流する。オーケランド・サンパブリア（ニュー・三一）番第三十一室で、山口熊野、中島半三郎らとともに邦字新聞『新日本』を発刊。日本政府批判を展開する。これは体裁の整った初めての新聞とされる。明治二十二年、桑港政論派（菅原伝、巨理篤治、山口熊野、大和正夫ら）の機関誌『十九世紀』と『新日本』が合流、オフアレル街に移転した。その後、明治二十三年には、日本人労働者五十人を率いてニューホープのホップス摘採に従事、サクラメント平原での日本人労働者の先駆とされる。あれこれの事業に手をだしたが失敗し、明治二十五年、父の財産の分け前を得て再び渡米。サンウオキンバレーで自作農を試みるも失敗。アラスカの季節労働者などを経てカリフォルニア州モデストの医師宅に塾居。生涯独身であった。昭和十九年、収容先のマンザナ強制キャンプで死去した。姉は石坂美那、義兄は北村透谷（「アメリカからの便り」『民権ブックス』第一〇号、町田市立自由民権資料館、一九九七年）。色川大吉「石坂公歴論」『東京経済大学人文科学論集』七号、一九六五年。鶴巻孝雄・渡辺奨「石坂昌孝とその時代」『豪農民権家の栄光と悲愴の生涯』（町田ジャーナル社、一九九七年）。「石坂公歴のアメリカ便り」（鶴巻孝雄研究室ホームページ <http://www.006.uhp.soken.ac.jp/tsuru-hp>）。

9 近藤賤男：慶応三年（一八六七）七月二十六日、昭和二年（一九二七）、享年六〇。慶応三年、相模国海津郡山下村に、近藤伝吉・ウタの長男として生まれる。幼い頃から魁偉豪壮な人物として衆目的であった。万田学校（現在の旭小学校の前身・忠文館支校）では、厳格な教師・出縄善太郎に影響を受け、幼年期を過す。明治十六年（一八八三）、同校を卒業後、上京し中村正直の同人社共立学校等で学ぶ。明治十七年十一月十五日には、神田須田町鷺屋で行われた石坂公歴の主宰する読書会に参加（参加者は、石坂公歴、北村門太郎（透谷）ら八名。明治十八年春、法律を学ぶため、自費渡航で渡米。渡米中、賤男は、明治十九年十二月十九日、渡米直後でも分らないでいた石坂公歴を鈴木房五郎とともに世話している。渡米後、小中学校で学んだ賤男は、菊花栽培で得た資金で、某大学に入り、次いでボストン大学に転学したが資金が尽きたので、代言人（弁護士）事務所を独習した。そして、アメリカ軍艦の小吏となり、欧州諸国、小アジア、南米諸国を巡り、ニューヨーク大学に入り法学を専修した。さらにコロンビア大学院で政治経済学を究め、明治二十八年、「master of arts」（文学修士）の称号を得る。困難に突き当たった時にも挫けず、それを打ち破るべき方策を見出し、臨機応変に対応する力は賤男独自のものである。しかも、そのなかで己の立てた目的を見失わずに成し遂げ

るのは「才子」（公歴の言葉）と言わざるを得ない。明治二十七年、日清戦争の際には「旅順屠殺」の誤報によって在米邦人に対するアメリカ人の感情が険悪になるのを演説や新聞紙面をもって和らげた。その後、実業界に入り、日米貿易の振興に尽力し、ニューヨーク商業会議所会頭とともにアメリカ各州の主な実業家を歴訪して日米貿易の必要を説き、主要な米国実業家とともに一大組合を結成した。ここでも公歴の言う「近藤ハ才子ナリ周旋ハ至極上手ナリ」という賤男の力が如何なく発揮される場面を見ることが出来る。明治二十九年、帰国すると、東京府京橋区八官町（現中央区銀座西八丁目）に事務所を開設、米国商品の見本を陳列し、英・スペイン・日の三か国語の雑誌を発行し、それぞれの北米・南米と国内各事業家に送っていた。後日、日米直貿易商社（のちに横浜に移り、日米輸出入会社と改称）を興した。次いで、日米商工協会を興し、その会頭に選任され『日米通商雑誌』を発行した。このほか彼は、太平洋貿易合名会社社長、米国万国製紙会社日本支店長などの要職を務め、雑誌『大日本』記者や『太陽』の編集主任としても活躍した。また明治三十八年、田中教侵が我国最初のセルロイドの素地製造工場を計画した際に相談にのつた一人でもあり、日本のセルロイド製造計画のバイオニアでもあった。昭和二年（一九二七）十一月九日、賤男は滞在していたアメリカのニューヨーク市マンハッタン区で没した。黎明期日本における日米貿易の先駆者と呼んでいいだろう（『明治人名辞典 下巻』日本図書センター、一九八八年）。「文化情報誌 たびわわ」第二十三号、平塚市、一九九七年・手塚晃編『幕末・明治海外渡航者総覧 第一巻 人物情報編』柏書房、一九九二年）。

10 この公歴の手紙は父昌孝宛で、日付はないが明治十九年十二月二十七日と鶴巻孝雄氏は推測されている。前掲註（8） 鶴巻孝雄研究室ホームページ「石坂公歴のアメリカ便り」。

- 1 前掲注（8） 鶴巻孝雄研究室ホームページ掲載、姉美那宛書簡。
- 2 前掲注（8） 鶴巻孝雄研究室ホームページ掲載、父昌孝宛書簡。
- 3 前掲注（2） 参照。
- 4 前掲注（8） 鶴巻孝雄研究室ホームページ掲載、両親宛書簡。
- 5 スマイルズ著中村正直訳金谷俊一郎現代語訳『西国立志編』（『自助論』PHP新書、二〇一三年。第三編「忍耐こそ成功の源泉である」及び第四編「勤勉な努力と忍耐が成功を生む」。